



2022年1月24日発行 第5号



もくじ

・巻頭 森と人	1	・地球発！	9
・2022年の抱負	2	・10回目を迎えた鎮魂復興市民植樹祭	10
・森づくりと温暖化防止	4	・心のふるさと探し	11
・森と暮らす	6	・森は友だち・編集後記	12
・足尾発！	8		

森と人

「森びと」という言葉には、何となく私を惹きつけるものがあるのです。それは、巨樹からなる自然の森の調査を終えて鬱蒼とした森の中で一息ついた時に、心が落ち着き、すべてを理解したような自分と森の小宇宙を感じる時が幾度かあったからです。森と人の関わりから見えてくる信仰のような世界観が、私を含め日本人たちにはあるのではないかと考えるようになりました。その世界観はいつ頃、形作られたのでしょうか。おそらく日本の豊かな自然から生まれ出たのであれば、日本人が最も密接に森と関わっていた時代、縄文時代にまで溯るのかもしれない。

縄文時代は16,000年前から3,000年前まで続き、弥生時代に繋がる更新世後期から完新世にまたがる時代とされています。私が学生の頃は、縄文時代は原始的な採集生活、弥生時代は稲作を主とした栽培による定住生活と習いましたが、各地の遺跡の調査から、実は、縄文文化は交易や栽培を伴う高度に発達した豊かな文化であったことが分かってきました。それを支えたのが豊かな自然、すなわち森の恵みです。最後の氷期が去り、温暖化に伴って夏緑広葉樹林が北へ、東日本へと広がっていきました。縄文の人々はブナ、トチノキ、クリ、ミズナラ、コナラの堅果を採集し、また、クリは植栽も行ったようです。豆類、エゴマ、麻などの栽培もみられました。

日本列島は氷河に覆われることなく多様な植物が生き残りました。また、海洋性気候の影響を受けて温暖で雨が多く、生産性の高い土地柄、森の恵みだけでも十分に暮らせたのです。高度に発達した採集



雪の日の森びと広場 撮影：加賀春吾

生活とでもいうのでしょうか、我々を楽しませる山菜、ワラビ、ゼンマイ、クサソテツ(コゴミ)、モミジガサ(シドケ)、オオバギボウシ(ウルイ)、ウワバミソウ(ミズナ)、ミヤマイラクサ(アイコ)、オケラ、ツルガネニンジン(トトキ)、ウド、タラノキ、ヤマノイモなど、枚挙にいとまがありませんが、縄文時代から利用されてきているのでしょうか。

人に恵みをもたらす森、また、人に試練も与える森に対して、命を受け、命を奪う存在が人は自然の一部だという意識を持たせるようになったのだと思います。哲学者・内山節は自然と人間の共同体という意識が里という村や集落の基底にあると言ってます。自然から得た恵みを余れば他に回す、足りなければ他から融通してもらうという「里」における相互扶助の関係は穏やかで正直な信仰心、すなわち自然への感謝の心を育んだと思います。我々は現代に繋がる「森びと」として森に感謝して生きていきたいものです。

代表 中村幸人

新春特殊

2022年の抱負

コロナ禍が収まらないまま明けた 2022 年。これまで以上に自然とかわるの重要性が問われる年になるのではないかと思います。そんな中、森びとを支える各県ファンクラブ（以下 FC と省略）の皆さんから、今年の抱負が届きました。FC の皆さんは、未来を生きる世代のために、「地球が健全な調整システムの力を発揮できること」を願って、地域で色々な活動を始めようとしています。新たな年を迎え、今年も心をひとつに「山と心に木を植える」活動を盛り上げていきましょう。

●宮城県ファンクラブ

地球上に生きる生物の生存が脅かされる危機的状況にある今日、地球温暖化に少しでもブレーキをかけるため、温室効果ガスの吸収源である森づくりを継続していきます。荒浜・名取の「いのちの森」を活動拠点に、育樹作業や観察会を行い、地球温暖化に向き合う想いや、森に寄り添う暮らしを目指すことを共有していきたいです。（代表 林雄一）

●東京都ファンクラブ

森びと事務所は東京都内ですので、私たちはその事務を手伝いながら、月一回を目標にして足尾現地の森作業に向かいます。また、生存が危ぶまれる自然環境の激変と、平和な暮らしと向き合う市民交流の三多摩地域版を、夏に実現したいと話合っています。各県 FC との熱い連携を創り出していきたいと思います。（役員会一同）



●栃木県ファンクラブ

昨年、県議会に提出し継続審議されている温室効果ガス排出ゼロに向けた「陳情書」のその後の見通しに期待しています。同時に、今年はその「陳情書」を市民の話し合いで多くの市民の要望書としてまと

めていきたい。その話し合いの場を作り、足尾にも足を運んでいただき、木を植えていただけるような出会いの場もつくり出していきます。

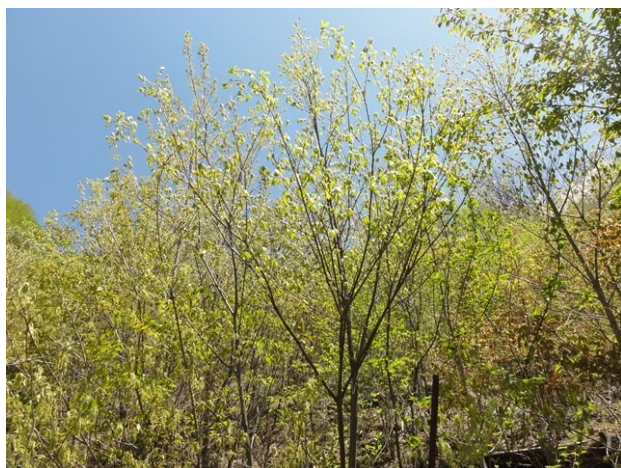
（代表 加賀春吾）



●茨城県ファンクラブ

昨年の茨城県 FC 結成以降、鎌倉街道と呼ばれる古道にあるお寺の放置竹林と、その周辺的环境整備を続けている私たち。利根町根本寺敷地内を活動拠点に設定し、地元関係者との出会いもつくりだせました。今年も地元の方々とのコミュニケーションを大切にし、森づくりへの理解を深めるきっかけにしたいと考えています。作業はなかなか進みませんが、皆で力を合わせて「山と心に木を植える」活動を地道にやっていきます。（副代表 大津崇）





●神奈川県ファンクラブ

神奈川 FC は昨年 11 月に結成いたしました。今年は神奈川 FC の具体的な活動を開始します。里親植樹への参加はもとより、神奈川県下での育苗・植樹を進めます。自然と触れ合う機会をつくり、共に活動する仲間と活動を盛り上げていきたいと願っています。自然と共生する喜び、ありがたみを共有し、自然界に責任を持つ心を育んでいきます。

（代表 木之下貴弘）



●福島県ファンクラブ

昨年、私たちは、2050 年までに温室効果ガス排出ゼロへの請願書を福島県議会へ提出しました。その中では、森林再生の重要性を訴えました。今年は、森びとの活動のウイングを更に広めていきます。1 月早々、現役をリタイアしたシニア世代に呼びかけ、そのための意見交換を開催します。今年も皆さんとスクラムを組んで、森と生きる地球環境を健全にしていければと願っています。（代表 齋藤章）

●秋田県ファンクラブ

昨年 11 月の「書面総会」によるファンクラブ結成。今年は新たな役員体制のもと、「2050 年までに温室効果ガス排出実質ゼロ」への市民の要望を県議会、市議会へ反映できるように努めます。この活動を通じて、森びとと会員への呼びかけを進めます。特に、次世代を生きる若者たちとの出会いをつくり、森びと秋田の希望の松明に着火したいと思っています。（事務長 大山博延）



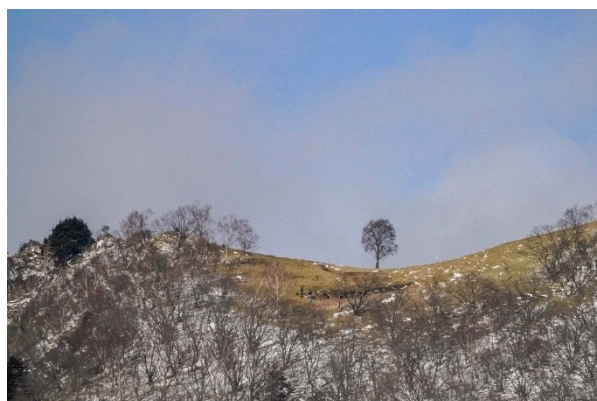
●千葉県ファンクラブ

昨年の秋、私たちは台風被害で荒れた花嫁街道の整備をしました。地元の歩こう会の皆さんとの協働として実現できました。春の温暖な花とハイキング、そしてトレイルランに多くの人が集う場所。夏になるとクジラ漁が始まります。森が地域の生活を支えています。巨大台風の災害ではその森が荒れています。今年は、暮らしの糧と癒しの場の整備を継続しながら、森に寄り添う生活の心得を地域から発信していきます。（事務長 武田芳明）

●みちのくファンクラブ

森びとの皆さんこんにちは。私たちは岩手山を眺める八幡平山麓のかつて栄えた鉱山跡地で、宮脇方式による森づくり活動を行っています。当初、「木は育たない」と言われた禿山の一部には、小さな森が育ち始めています。昨年からは草刈りなどの育樹活動をメインに行っています。今年からは 10 数年間の森づくりに携わった皆さんに足を運んでいただき、木々の力強さと生きものたちの息づかいを感じてほしいと願っています。（事務長 高野秀幸）

2022年の森づくり



舟石峠からの臨む孤高のブナ
撮影：林子

C O P 26 合意の意味と今後 10 年間の森と生きる心構え

森びと会員の皆様 明けましておめでとうございます。今年も“山と心に木を植える”を合言葉にして、大地に木を植えて育て、心には森と生きる心得を植えていきたいと思います。

今年の活動も昨年と同様の事を愚直に続けていきますが、今年は加速する「脱炭素社会」に向き合う森びとの生活スタイルを探し当てたいと思います。

世界主要国の首脳や、裕福な人々は「脱炭素社会」の実現に向けてその政策を加速させています。正直に言って、その社会は市民・労働者・農漁民・学生たちにとって手放して喜べるシステムだと私には思えません。この気持ちを曖昧にしていると、私たちの活動が森びとと規約の目的から脱線してしまうのではないかと心配しています。その一部をまとめましたので、忌憚のないご意見やアドバイスを期待しています。

■地球環境システムの健全化を第一にした脱炭素社会

脱炭素社会へ向けた国々の政策は、COP26 グラスゴー気候合意で示されているような温室効果ガス削減への取り組み、森林破壊を止める、後進国の温暖化対策を支援する等です。しかし、その中身を見ると、化石燃料を廃止していく方向性は「削減」に修正されました。他方、先進国間では EV 車生産の競争が激烈になっています。多分、その背景には EV 車生産に欠かせない自国優先のエネルギー確保があるのではないかと思います。

いうまでもありませんが、人間の生存や経済活動はその基盤である地球全体のシステムが健全に機能しなければなりません。北極や南極の氷は太陽からの熱を約 90% も宇宙に返しています。氷が溶けて液体になると色は白から暗い色に変わり、反射する熱よりも吸収熱の方が多くなります。快適な気温で生活できるのはこの反射力があるからです。2020 年の夏、ロシアでは気温 38℃ を記録しました。2021 年はカナダで気温 49.6℃ を観測しました。北極海の夏の海水が小さくなり、消滅するということに警告を発しているのが世界の科学者です。地球環境の大切な調節システムの臨界点を越えないようにしなければならない時間は短いと言われています。

地球全体のシステムを調整する機能は、例えば、北極、南極、海洋循環、大規模森林系等（SDGs 15 陸の豊かさを守ろう）が健全な状態で存在しているからです。明らかになっていることは、グリーンランドと北極の氷が溶けて冷たい淡水が大西洋に流れ出すと海流循環システムが変化するとされ、暖かい表面海水が南の海にとどまり、南極の氷の溶解を加速させます。

現在の地球は「小さな変化が急激な変化に転じる転換点」にあります。取り返しのつかない事態にならないように踏ん張っていられる時間がないと言われています。「脱炭素社会」像は、まず、地球環境システムの健全な機能が発揮できる生存基盤を確立させる政策を第一に据えなければならないと思います。

■「公平な移行」へのプロセスの公開と市民の声を反映

地球環境の調整システムを臨界点に追い込んだのは人間の経済活動です。どうしてそのようになってしまったのかは様々な要因がありますが、一方では、“より豊かな生活求めてきた結果”、他方では、企業経営者の“大量生産・大量消費”という生活を基盤にした利益優先の経済活動が大きいのではないかと思います。この過程では、天然資源は無限であり、経済成長はいつまでも続くという神話に呪われてしまったのかもしれませんが。地球環境の調整システムに過度な負担を負わせた結果が、自然界からのしっぺ返しとなり、私たちの暮らしを脅かしていると思っています。その一人として、自戒の念をもち、科学的な知見に寄り添って「脱炭素社会」に向き合っていくことが私たちであり、森びとの規約に書かれている事ではないかと思います。

米国前大統領のトランプさんは、地球温暖化に懐疑的な有権者、石炭関係者ファーストのスタンスではなかったかと思います。化石燃料関連で働く労働者は脱炭素社会には不安をもっています。仮に、私も石炭労働者であれば、生存のための雇用が不安になります。トヨタは今後 350 万台の EV 車を生産販売すると発表しましたが、関連会社も含めてそこに働く労働者は雇用不安、中小企業経営者は先行きの不安を抱えます。また、EV 車は電力が欠かせません。現在、日本の登録台数の車が EV 車に置き換えると、新規の原発を 10 基新設する必要があると言われていいます。「脱原発社会には原発が欠かせない」等という声が出てくるかもしれません。

ビニールハウスで農作物を生産している農民はエネルギーの転換に伴う設備投資、漁民にはモーターで動く船舶へ移行等が直撃します。脱炭素社会は良いこと尽くめという印象が強いですが、生活現場、労働現場からその社会を深掘りしていかなければ多くの市民・労働者・学生たちが取り残されるのではと心配です。

「公平な移行」ということが言われていますが、このスローガンを実現させていくには市民・労働者・学生はじめすべての人が団結して、誰もが取り残されない脱炭素社会を描き、実現していかなければならないと思います。



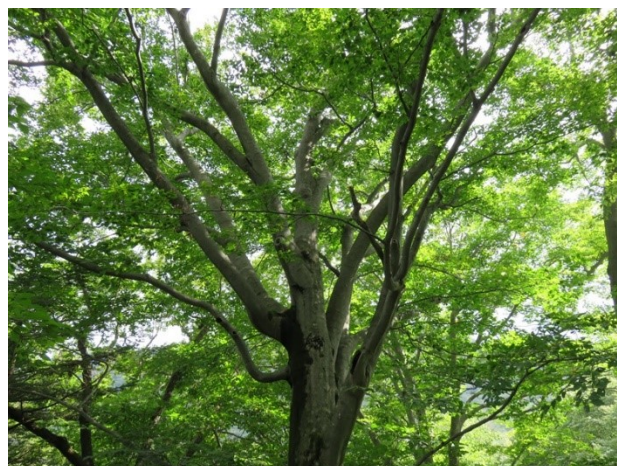
■希望の楽園づくりへ心をひとつに

今年はこれまでの活動と共に、私たちの生活スタイルを深掘りできるきっかけの場を、「森の友だち探し」（仮称）として足尾町と東京都で実施してく予定です。足尾で育てている森を散策していただき、森と人の大切な関係を五感で体感していただきます。東京都では四季毎に公園の森を散策していただき、森は大切な友だちであることを体感していただきます。

また、森びと各県ファンクラブの皆さんは、地域の生活は森に支えられていることや森は大切な友だちであることを、地域の皆さんと語り合っていく場をつくっていく予定です。

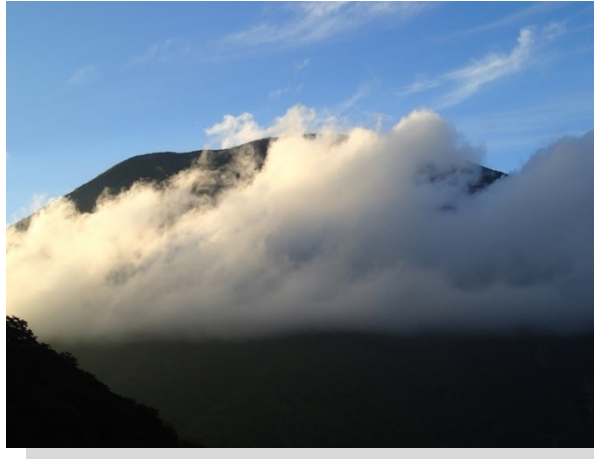
やれることは小さなことですが、やっていくことは脱炭素社会を生き抜くために、地球全体のシステムを調整する機能を健全にする活動にしたいと願っています。

副代表 清水卓



森と暮らす

田舎暮らしは甘くない



「テレビ局の社員はタレントと楽しそうでいいな」と皆に言われますが、私がニュース部門で過ごした30数年は、地獄のような忙しさで、楽しむ暇などありませんでした。とくに1995年に起きたオウム真理教の一連の事件では、警察担当として3か月は家に帰ることもできませんでした。週に2回、家内に下着と着替えを持ってこさせ、桜田門の警視庁の中にある狭い記者クラブで寝起きしていたのです。

また忘れもしない2011年3月11日の東京電力福島第一原発事故の時には、ほとんど終日テレビの解説に追われ、会社近くのホテルで2時間仮眠をとるだけの生活が2か月ほど続きました。

記者としての仕事の醍醐味は世界中のどこにでも行く機会があることです。30余年の記者生活で、中国支局長として北京で3年半過ごしたほか、取材で40数か国を回りました。また歴史的場面に何度も立ち会いましたし、首相を含めて誰にでも会うことができました。記者冥利に尽きます。

そんな私ですが、実は若いころから自然が大好きでした。中学・高校時代を含めて、ほとんど毎週末、テントひとつと飯盒を持ってキャンプに出掛けていました。今はアウトドア用品が豊富に取り揃えられ、テントもワンタッチで開くなど、とても便利になりましたが、当時のテントは実に重く、雨が降るとテント内に容易に水が侵入してきました。

食事はいつもカレーライスです。枯れ葉や小枝を集め、小さな火を起こして飯盒で炊くご飯は得も言

われぬよい香りを放っていました。

キャンプに出掛けると言っても遠くのリゾート地のキャンプ場に行くわけではありません。私は当時千葉市に住んでいましたが、バスで10分ほど行くと、そこここに林や竹林が残っていました。土地の所有者は皆おおらかで、自由にキャンプして火を焚いても何も言われませんでした。

キャンプの醍醐味は何といっても夜の星空と空気です。

結婚して子供ができてからは、いつか自然の中に小さな丸太小屋を作って、子供たちと自然の中で過ごしたいと夢みていました。毎週末、子供たちを連れて房総半島を車で巡り、土地探しに出かけたものです。

ある時、夷隅川のほとりに造成した土地を見つけました。お隣さんは沖縄県出身のOさんというおじいさんで、タクシー運転手を退職してご夫婦で暮らしていました。とても優しく、朗らかな人柄に惚れて、すぐに土地を買い求めました。知り合いに頼んでフィンランドからログハウス用の木材を輸入して、大工さんに建ててもらいました。木の香りが素晴らしく、庭に木を植えるのが楽しみでした。

ところが丸太小屋が完成した途端、私は北京での勤務を命じられたのです。1997年1月6日に家族とともに北京の空港に降り立つと、日本の冬の青空とは全く異なり、石炭火力発電所の煤煙で空気はどんよりとしていました。その時、自然がどれほど大切なものか、改めて実感しました。

2000年に日本に帰ってからでも記者の仕事は息つく暇がありませんでした。それでも何とか乗り切れたのは、丸太小屋と自然のおかげでした。

お隣のOさんは素晴らしい畑で様々な野菜を作っていました。とくにニガウリは最高で、ほかにもジャガイモやタマネギ、ダイコンなどをお裾分けいただきました。Oさんの畑は周辺とは異なり、真っ黒な土で畝も真っすぐでした。肥料をやり、水をやり、草をむしり、耕し、畝を作り、これを1年中繰り返して土を育て、さまざまな野菜を作っていました。まさに田舎暮らしマイスターです。

私も野菜と一緒に作らせてもらったことがありますが、育つまでには大変な手間がかかり、しかも腰が曲がるほど痛くなることから、「これは拷問だ」と思うほどでした。

世の中では田舎暮らしがブームのようですが、それほど甘くないのが現実です。今も週末は丸太小屋で過ごします。草むしりにほとんどの時間をとられ、「私は一体何をしに来ているのか」と自問自答するほどですが、すっきりと草を刈った庭に椅子を並べて、夕暮れ時に飲むビールの味は格別で、「生きていてよかった」と思う瞬間です。

いま私は科学や環境を専門に取材を続けています。科学の発展は急速で、人工知能、IoT、次世代通信ネットワーク5G、ゲノム編集、ロボティクスなどの話題が新聞に載らない日はありません。しかしよく考えてみると、私を含めていずれ土に返るのです。土の中で分解され、養分として植物に吸い上げられる運命なのです。つまり自然の一部なのです。

人間はおごり高ぶってははいけません。人間がいかにわがままに地球を破壊してきたか、今こそ振り返る時です。科学が何でもできると思っただけは大間違いです。高々0.1ミクロンほどの新型コロナウイルスに右往左往しているのが人間なのです。

私は記者として長く原発の危険性に警鐘を鳴らしてきました。しかし東電福島第一原発事故は起きてしまいました。帰還困難区域には立ち入りを禁じられ、原子力緊急事態宣言は今も出されたままです。

房総の美しい海はプラスチックで汚染されています。100億トンを超えるプラスチックが海に流れ込み、粉々になって魚の体内に蓄積されてそれを私達

が食べています。温暖化の原因となる二酸化炭素も同様です。私たちが息を吸い、息を吐くたびに大気を汚染しているのです。地球は人間のためだけのものではありません。

「自然を守る」といっても出来ないことを目標にしては意味がありません。すべての原発を明日ゼロにしろと言っても無理な話です。しかし私たちができることはやらなければなりません。

身の回りを見てください。電気を使いすぎていないでしょうか。なぜ繁華街は夜も煌々と明るくなければならないのでしょうか。夜は暗いものなのです。なぜお金を出して自動販売機の水を買わなければならないのでしょうか。私が子供の頃は飲み物と言えば水道水と粉末ジュースだけでした。

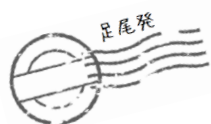
なぜティッシュがいつも手元になければ不安なのでしょうか。かつては新聞紙を再生したチリ紙でした。黒チリと呼ばれていました。なぜ使い捨てのバックやコップ、ストロー、割り箸がコンビニのゴミ箱に溢れているのでしょうか。

そう考えると私たちが普段の生活でできることはたくさんあります。暖房や冷房の代わりに衣類で調整できます。寒い時は着る、暑い時は脱ぐ、それだけです。トイレから出たらペーパータオルではなく、ハンカチで手を拭けばいいのです。私は鼻をかむのもティッシュではなくハンカチです。無駄に電気を使っていませんか。無駄に食べ残しを捨てていませんか。ものを粗末にしていませんか。

ぜひ自然に親しみ、新鮮な空気の中で質素な食事を楽しみ、夜の星を眺め、人間はどこから来てどこへ行くのか、考えてみてください。今しなければならぬことが見えてくると、私は確信しています。

アドバイザー 倉澤治雄





足尾発！中倉山ブナ保護活動

崖っぷちのブナ生長の一助になれた喜び



アメリカのインディアナ州から参りましたカエル・ダント（Cael Dant）と申します。昨年11月、私は初めて「中倉山のブナを元気にする恩送り」に参加させていただきました。

2017年～2020年まで栃木県庁国際課にて「国際交流員」として務めておりました。国際交流員とは幅広い職ですが、その一部として栃木県立学校等で勤務されているALT（語学指導助手）の方々と協力して県民の国際理解や外国人との交流に取り組んでいました。当時、栃木市でALTとして勤めていた仲間のザイ・ハーさんを通して森びとプロジェクトを知り、今回初めて中倉山に登りました。

私の故郷のインディアナ州はアメリカの内陸の平地にあり、山も海も全くありませんので、私にとっては、どれだけ日本にいても北関東の山の風景や生態系がとても魅力的にうつります。2020年に転職して上京しましたが、今もよく日光にハイキングや登山に行っています。もともと生き物、特に植物が大好きで、来日前にもアメリカの大学で生物学を日本語と共に勉強し、卒業後は、植物研究ラボや植物標本館で仕事をしたこともあり、ハイキングしながら日光山々の植物界に貢献できるボランティア活動に参加できることがとても楽しみでした。

土を運びながら山に登る活動とはどういう経験になるのかはよく想像できなかったのですが、とても楽しく達成感を得た一日になりました。中倉山の周辺

では軽いハイキングをしたことがありましたが、登るのは初めてでした。麓で集まって、土や道具が参加者に配布された後、皆で登り始めました。山頂の近くに到着したら空にくっきりと浮かび上がる一本のブナの木が見えてきました。崖のところに立つその木の根元に運んできた土を置き、その土を止める草の種を蒔きました。

中倉山は急な山ではありませんが、土を背負って登ってみたら気持ちよく疲れて、翌日に「昨日よく頑張った」と思うほど筋肉痛もありました。一本の木のために人がこんなに集まり、こんなに努力することに感動して、参加できて良かったと思います。頂上から望んだ緑と赤と茶色が混ざった秋の山の絶景も素晴らしい印象を残しました。

森の一本一本の木を助けることができなくても、崖のところに独りで立ち続きけるブナに何らかの力になれば嬉しいです。これから是非みなさんと中倉山などの木の元気に貢献していきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

参加者 カエル・ダント（Cael Dant）



左から会員の荒川さん、ザイ・ハーさん、カエル・ダントさん



地球発！

気候変動の公平な解決策を見いだすミシガン大の学生たち

先日ミシガン大学のエミリーさんから、米国の学生さんをはじめ若者世代について、「彼らは自然を守ることと選挙での投票行為を結びつけて考える傾向がある」と伺いました。それに関しては、昨年10月の日本での衆議院議員総選挙の若い世代の投票率の低さについても話題にのぼりました。

彼女は、「米国では人々が選挙の登録をすることが難しくなることがあります。特に、低所得の方々、肌の色によって、そして新規登録が必要な若い有権者にとっては、その傾向が強いと言えます。また、未登録の有権者がいる場所（大学のキャンパスなど）に登録のサポートを設けることは、人々にとって投票を妨げる障害を減らすために非常に有効です。」と話してくれました。

日本では基本的に国政・地方選挙の投票日は、日曜日に設定されています。しかし、米国では「11月の第1月曜日のあとの火曜日」と決められています。それは1845年に連邦法で定められ、当時の有権者の多くは農業を営むキリスト教徒だったことから、教会に行く日曜日や春から秋の農業が忙しい時期を避けて設定されたそうです。

165年以上経った今もこの曜日設定は変わらず、投票所は主要都市に設置されています。農村部に住む有権者は投票所まで何時間も運転し、投票所では身分証明書を提示して投票を行います。現実には、「平日に休みを貰える仕事に勤め、車を持っていて、身分証明書を持っていないと投票が困難」という事実があり、住所のない方々やホームレスの方々、身体障害を持つ方などにとっては高いハードルがあります。キャンパスでは投票のために登録が必要な学生のために、ミシガン大学では登録のサポートをボランティアで行われています。大学によっては何時間もの行列が出来る投票所もあると言います。

エミリーさんは学生の方々と森で過ごす写真を送ってくれました。「写真は10月にミシガン州のエドウィン・S・ジョージ保護区で学生たちと静養したときに撮ったものです。ここは、ミシガン大学の



上：森を散策する学生たち 下：体験植樹の様子

生態進化生物学部が管理する森林研究施設で、毎年秋になると、私たちは大学1年生の学生を連れて2日間森の中に出かけます。食虫植物や野生のクランベリーが生息する美しい湿地帯を体験し、外で映画を見たり、焚き火をしたり、テントでキャンプをしたりと、楽しい時間を過ごしました。この学生たちは将来の世代の一部であり、気候変動に対する公平な解決策を見出し、持続可能な未来を確保するために非常に熱心に取り組んでいます。」とのことでした。

足尾で植樹体験をしてくれましたレズリー教授とエミリーさん。エミリーさんからは、足尾に同行して下さった学生たちは、政治と環境、そして自分たちにできる事と社会に求めていくというハッキリとした強い思いが溢れている様子を伺うことができました。

森、そこに生きる微生物も含む生態系を身近に感じ、自然の美しさやその恵みを体感することで、自然環境の為に、仕事や研究をする時も、自然環境に密接に関連する政治でも、参加することが生活の一部であることが心に沁み込んでいるように思いました。

運営委員 太宰初夏

10回目を迎えた鎮魂復興市民植樹祭

いざ！という時には命を守る森の防潮堤



私は 11 年前の東日本大震災の大津波で新築 2 年の家を壊されました。家は、海岸から 1.2km 付近にあり、津波で流された大きな松の木で全壊しました。津波が引いた後、泥だらけの座敷の上には巨大な松の木が横たわっているのを見て、「これが被害を大きくした」と感じました。その後、全国からボランティアによって家の内外の後片付け、泥だし等をしていただきました。その恩返しのためと思い、いのちを守る森の防潮堤づくり活動に参加することにしました。景観よりも、深根のふるさとの木を一本でも多く植えていきたいと願い、応援隊の一員となりました。津波からいのちを守るために森の力を借りるという考え方は沿岸生活者には有難いことだと信じ、2013 年 10 月に始まった「鎮魂復興市民植樹祭」を応援してきました。植樹祭は 2022 年で 10 回目を迎えることになりました。

木々は人間の思い通りに育ってくれません。昨年まで植えた木は約 168,000 本ですが、植えた幼木は土を盛った場所に苗木を植える土に混じっている草の種、風や生きものたちに運ばれてきた草の種との生存競争が待っています。今では約 40,600 m²の森が出来ていますが、植樹祭毎にこの広い森の草刈り等をやらなければなりません。その上、ネズミ等に根を食われて枯れる幼木もあります。このような植樹会場での育樹活動、補植する苗を育てる育苗活動を、私たちは年間延べ 300 名程が無償のボランティアで行っています。

シニア世代が活動の中心ですが、皆さんすこぶる

元気で、楽しい森づくりをすすめています。応援隊のいいところは、言いたいことはお互いに言い、決めた事はきちんと実行することです。南相馬市役所の職員とも意見交換を深めながら、市民と行政の協働を追究しています。今年は、全国の皆さんに私たちが育てている森を観ていただき、今後の森づくりへ向けた元気とヒントを共有できればと願っています。ところが、現場では残念なことが起こっています。木々が生長している小さな森に家電、タイヤ等が不法投棄されていることがわかりました。いのちを守る森の機能ということの理解が薄れてきたのかと残念でなりません。10 回目の植樹祭を迎えるに当たり、私たちは市役所と不法投棄を無くす話し合いをすすめています。

東日本大震災では、南相馬市民 636 名の方が犠牲となり、10 年経っても行方不明の方がおります。私たちの森づくりでは犠牲になった方々を慰霊し、原発事故と大地震の経験と教訓を後世に継承することを忘れないようにしています。津波によって壊された家族や友人との思いが一杯つまった「ガレキ」を盛土に混ぜ合わせ、原発事故で故郷を失った「悲しい思い出と怒り」を木々に宿した森を育てているつもりです。

2022 年、鎮魂復興市民植樹祭は 10 回目を迎えるにあたり、私たちは新企画を話し合っています。そのひとつは、育てた森を観ていただく散策の案内ができるような準備・研修を始めたいと思います。また、植樹祭の時以外に植樹したい方々の希望を受け入れられる環境を整えていきたいと思います。森づくりの専門家、学者ではありませんので学問的な案内はできませんが、森と生きることの大切さ、脱原発宣言市民の思い等を語り合いながら、森を散策できれば嬉しく思います。

森の防潮堤が少しでも地球を元気にし、「いざ！」という時には命を守る力になってくれる市民の憩いの森になるまで見守っていきたいと思っています。全国のみなさん、ぜひ一本でも多く木を植え、生長した森を見に来て下さい。

「応援隊」代表 渡部俊一

心のふるさと探し

足尾銅山労働者の生活を支えた森づくり！



今から 13 年前に観たビデオのシーンが今でも私の頭から消えません。自然と涙が出たビデオは、「森びとインストラクター養成講座」で上映された「種が流れる」(NHK)というドキュメントでした。内容は、足尾の煙害地での森の再生記録で、モンペ姿の女性たちが手ぬぐいを被って岩と砂利だけの山肌を歩いていました。その背には板チョコを大きくしたような植生盤を背負い、急傾斜の荒廃地に荷揚げしていました。運び揚げられた植生盤は草の種、土、肥料が混ざって圧縮されていました。その盤は、銅精錬過程で排出された煙によって草木が生えなくなった山肌にヤナギの枝で張り付けられました。この作業を延々と続けていたのが女性たちで、多くは銅山で働く坑夫の妻たちでした。

雷の本場であった足尾町でのこの労苦は、女性たちが岩に張り付けた植生盤が流されるたびに繰り返されました。私は、そんな想像を絶する森づくりの映像を観て、涙が止まりませんでした。一度壊した森を再生する森づくりは中途半端な気持ちではできないと考えさせられました。

木にとって命となる「土」を足尾岩山に運び揚げてくれた女性たち。この労苦がなければ「緑が増えましたねー！」という声は聴こえません。あの過酷な長期にわたる労働を支えたものは何なのか？当時の女性たちから話が訊きたくなり、町民を探しましたが、高齢化、入院中、他界していることで女性たちとは会えませんでした。唯一お会いできた方は、足尾治山事業所で働いていた足尾町在住の内藤初枝さんでした。

内藤さんの話では、植生盤を使った治山事業は昭和 28 年（1953 年）頃から始められ、表土が失われた荒廃地での緑化には画期的な方法でした。その後、植生盤から植生袋に進化しましたが、当時の治山事業受託業社に雇われた女性たちは各 30～40 人ほどいたそうです。

その頃の足尾町は銅山に関わる仕事以外に働く場所は限られており、決して豊かではなかった坑夫家族の女性たちは、きつい仕事と分かっていながらこの森作業に応募していたと言います。子の健康や教育の為に、応募した女性たちは沢山いたと言います。とても厳しい作業でしたが、女性たちの家族思いを支えたのが森づくりでした。

私たちはその女性たちが張り付けた植生盤、植生袋から芽吹いた草地で森づくりをしています。亡き宮脇昭最高顧問をして、「これほどうまくいくとは思わなかった」と言わしめた素晴らしい森が育っています。先生の教えで「木は根、根は土」と何度も聞かされましたが、私たちの成功の陰には、過酷な女性たちの労働が存在していることを忘れてはなりません。その女性たちの家族思いが、今では生態系豊かな森を育み、灼熱の地球にさせない森の機能を発揮していると思うと、私たちの暮らしは森に寄り添っていると感じます。過日、内藤さんとその友人を松木沢の森へ案内しました。お二人のたつての希望でしたので、人と森の支え合いの大切さを感じ取っていただきました。

森づくりサポーター 橋倉喜一



急斜面に植生盤を張り付ける当時の女性たち

森は友だち

深い眠りに入っている足尾の森。「白沢の森」の階段を登ると、シャキ！シャキ！という霜柱を踏みつける音が聴こえる。背には 20 kg もある間伐材を、時には、金網を背負って急傾斜の階段を登っていく。暫く登ると吐く息は絶え絶えになる。途中、冷たい幹につかまり小休止。運び揚げ終わると、何とも言えない気分になって充実のひと時。

汗を拭きながら仲間の顔を見る。その横顔からは、清々しい気持ちが伝わってくる。身体が冷えないうちに作業を始める。互いを気遣いながらの冬の森作業の積み重ねは、強者たちを私たちが目指す“森びと”に育てあげてくれる。

その一人が福原辰雄さん。雪国で培った森と暮らす知恵と忍耐力が土台となって、足尾の森づくりでは欠かせない強者になっている。毎月、休日に足尾に入り、ひと一倍に重い材や土を運び揚げて作業をリードし、沢水が出なければ取水口に向かって小屋の環境を整える。たまには雪国の草木を持って来て「みちくさの庭」に植えてくれる。それは、森ともたちやハイカーの心に森と暮らすことの素晴らしさを伝えている。春は山菜のギボウシの恵み、夏は花のコオニユリの香りと花の楽しみ、秋はアケビの実とツノハシバミの実の恵みを味わえることが嬉しい。彼の動きを見ていると、森に寄り添って生きている人間の姿勢や気持ちを仲間たちに伝達しているように感じる。

福原さんの森づくりに向かう姿勢からは学ぶことが多い。雪国で培った森と生きる暮らしの知恵が足尾の森づくりに発揮されている。その心には人間社会に欠かせない支え合いの精神も貫かれている。森づくりは友を育て、さらには同志関係も築いてくれる。（顧問 高橋佳夫）

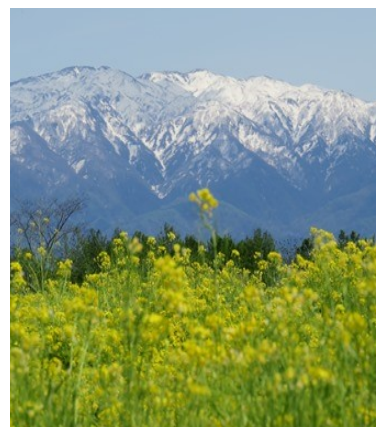
編集後記

先日スーパーで見たお菓子のパッケージに『食べたみ』という表記がありました。ははは誤植してら、「食べたさ」だんべ、と思って調べてみると若い人たちには通じる語

尾の形なのだから。やたらと違和感を感じたのですが、その後我が家ではことあるごとに語尾を『み』にしてしまう流行りように。基本ちょっと小ばかにする場合に使用するのですが、言葉というのはお互いが通じるのであれば良いのであって、新しい響きはちょっと新鮮で感情を動かすものだと思いました。そういえば、『森びと』や『森とも』・『孤高のブナ』といった新しい言葉を森びとも作っていますよね。気候変動や自然とのかかわり方についての言葉

は、特別に興味がある人を除くと、多くの人々にまったくもって届いていないと感じています。新しい言葉や新しいツールを使って、もっともっと広い世代に刺さる

ような、そして多くの人たちが喜んで使ってくれるような、そんな言葉や方法で森びとを表現していきたいと、ちょっと真面目に年頭の思いとして書いてみました。「森のなか入る幸せうれしみに」（広報 小黒伸也）



森の木魂（こだま）第5号（2022年1月24日発行）



発行：森びとプロジェクト

発行人：中村幸人

編集人：森びとプロジェクト編集委員

第一版

〒141-0031

東京都品川区西五反田 3-2-13 303 号室

TEL&FAX 03-6417-3750

<http://www.moribito.info/>

Email info@moribito.info

